

子どもに対する日本・アメリカ青年の認知・ 態度に関する交差文化的研究

本田時雄⁽¹⁾・ヨシミツ タケイ⁽²⁾・白井三香子⁽¹⁾

A Cross-Cultural Study in Japanese and American Adolescents: A Factor Analytic Study of Their Cognition and Attitude toward Children

Tokio Honda · Yoshimitu Takei · Mikako Shirai

Authors intention is to have Japanese and American people understanding each other better. In this article, we aim to clarify similarities and differences between Japanese and American adolescents cognition and attitude toward children with factor analyses of 27 statements about children.

Japanese respondents consisted of 347 students ; 136 males and 211 females at Bunkyo Univ. American adolescents consisted of 330 undergraduates ; 81 males and 229 females at Pennsylvania State Univ.

The main results were as follows ; 1) While 5 factors were extracted for Japanese female adolescents, 4 factors were found on 5 other groups. 2) A factor "Child-rearing as a social norm" was common to all 6 groups. 3) Unique factors "Change of viewpoint of children," "Feelings of identification with children" and "Natural bond between couples and children" were found.

我々は、日本人とアメリカ人が相互により良く理解することを願い、そのための前段階として、父母・子ども及び自己に対する認知や態度に関し、両国民や日系二世などの類似性と差異を明らかにすることが必須であると考えた。従来の日米などの比較研究は、子ども（多くは小学生以下）を対象としたものが圧倒的に多く、青年期以降を研究対象とした

ものは極めて少数である。そこで本研究の目的は、日米青年の、子どもに対する認知と態度における類似点と相違点を、因子分析によって明らかにすることにある。

方 法

1. 調 査 項 目

子どもの価値観に関する27項目は、福井と

(1) 文教大学人間科学部

(2) ペンシルバニア州立大学教育学部

み子他(1976)の日本人女性に関する調査で使用したものを、本研究では回答者として男性も含まれるので、前記27項目のうち女性の1項目に対応する1項目を男性用として付加した(もし私が女なら、子どもを産んでみたい)。この日本版を本田が英訳した後、Takeiとチェックして英語版を作製した。

評定のカテゴリーは、福井らは3件法(賛成、どちらともいえない、反対)を用いたが、本研究では5件法(賛成、やや賛成、どちらともいえない、やや反対、反対)を使用した。これは、因子分析など数量的解析を行う場合、評定のレンジが大きいほうが望ましいためである。

2. 回 答 者

回答者の一つのグループは、アメリカのPenn. State Univ.(ペンシルバニア州立大学)で教育学を主専攻または副専攻している男子81名、女子229名(合計330名)の学部学生である。そしてもう一つのグループは、日本の文教大学で教育学と人間科学を専攻している男子136名、女子211名(合計347名)の学部学生である。調査は授業中に実施された。(アメリカでは1989年11月、日本では1990年5月に実施した。)

3. 結 果 の 処 理

評定された5段階に1~5を与え、Pearsonの相関を算出して、主因子解(iterationの基準は0.001)による因子分析を行い、さらにVarimax回転をほどこした(SASによる)。上記の処理を①アメリカ青年男女、②アメリカ男子、③アメリカ女子、④日本青年男女、⑤日本男子、⑥日本女子の、6群に適用した。尚、因子負荷量0.35以上の項目を採用して、解釈した。

結 果

I. ア メ リ カ

①アメリカ青年男女(以下『アメリカA』と略す)。

直交した4因子が抽出され、分散8.462、すなわち全分散の31.34%が説明された。これら

の因子は1項目を除いては互いに完全に独立したものである。

因子I - 社会的規範としての子育て

この因子の寄与率は12.59%(相対寄与率は40.18%)であった。負荷量0.35以上の項目は7項目あり、その値は0.736~0.435の範囲に及んでいた。その項目はC18(子どもを作るのは結婚の重要な意義のひとつである)、C15(子どもがいて初めて社会的に家庭といえる)、C14(人生で大事なことは、子どもを育てて初めて経験できる)などである。これらの項目は、子供を育てることを社会的規範とみなすものであり、『社会的規範としての子育て』の因子と命名されよう。これらの項目は否定的な方向に評定された(3.6~4.3)。つまりアメリ

Table 1 All-American's Factor Analysis

	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4
C18	0.73622	0.06196	0.11735	0.15329
C15	0.71732	0.15552	0.07095	0.13462
C14	0.66797	0.23808	0.02706	0.15733
C6	0.66068	0.15170	0.14211	-0.12276
C13	0.63263	0.17083	0.09235	-0.12875
C4	0.55922	0.16470	0.00995	0.06487
C7	0.43583	0.23174	0.20342	-0.06487
C21	0.13607	0.63223	-0.02458	0.17864
C23	0.15580	0.60426	0.01594	0.11633
C19	0.19251	0.51221	-0.06877	0.06765
C27	0.26886	0.46125	-0.22451	0.14173
C5	0.17668	0.43717	0.03481	-0.03113
C16	0.33108	0.39805	0.05468	-0.08794
C1	0.10905	0.38803	-0.09095	0.02365
C12	0.01850	0.34617	0.24994	0.16705
C8	-0.01590	0.25617	0.12405	0.09429
C10	-0.01556	-0.03205	0.62650	-0.12356
C17	0.07962	-0.08359	0.46297	0.11154
C11	0.13024	0.05168	0.42391	0.12737
C3	0.04659	-0.06727	0.39418	0.07565
C20	0.27691	0.18960	0.29548	0.10292
C9	0.05098	0.00170	0.28209	-0.07033
C2	0.01108	0.05794	0.27655	0.05717
C22	0.10503	0.24652	0.12515	0.62275
C24	0.13932	0.37670	0.12456	0.48834
C26	0.30240	0.34655	-0.00614	0.35465
C25	-0.16141	0.03649	-0.00567	0.21884
$\Sigma\sigma^2$	3.400730	2.521034	1.452600	1.087946

カAは、子育てを社会的規範と考えることに否定的であった。

因子Ⅱ—素晴らしき存在としての子ども

この因子の寄与率は9.33%（相対寄与率は29.79%）であった。負荷量のもっとも大きい項目はC21（子どもを育てることも自己の成長につながる）で、そしてC23（子どもは夫婦の結びつきを一層強める）、C19（子どもの成長こそ一番の喜びである）、C27（女である以上子どもを産んでみたい・もし私が男なら子どもを産んでみたい）の他、4項目の負荷量が大であった。C24（子どもを残すことで、自分が生きた証拠を残せる）は第4因子と重複していたが、負荷量は0.378(FⅡ)と0.488(FⅣ)であった。

これらの項目は、いずれも子どもの素晴らしさと大切さを示している。アメリカAはその意見に対して肯定的であった。

因子Ⅲ—トラブルメーカーとしての子ども

分散1.453、すなわち全分散の5.33%が説明された（相対寄与率は17.17%）。因子負荷量0.35を越えたのはC10（子どもがいると自分の自由な行動が制限される）、C17（子どもの世話は精神的・肉体的に疲れる）、C11（子どもが自分を必要だと感じてくれるだけでも生きている甲斐がある）、C3（子どもがいると、夫婦の間に問題をたくさんひきおこす）の4項目であった。これらは第Ⅱ因子と反対にやっかいな存在としての子どもを表している。アメリカAの評定値は3.2~3.8で、否定的であり、彼らは子どもをトラブルメーカーとは考えていなかった。

因子Ⅳ—自己の分身としての子ども

寄与率は4.04%（相対寄与率は12.86%）。因子負荷量が0.35%を越えた項目は、C22（子どもがいれば、死後も自己の分身が生き続けていると感じることができる）、C24、C26（子どもがいることは大きな張り合いである）であった。これらの項目は、親が、自分たちは死後も子どもたちの中で生き続けたいと望んでいることを示している。アメリカAは、因子Ⅱと同じく、この考えにも同意し

ていた。ちなみに0.35を越えるすべての負荷量の項目はプラスであった。また、もし採用する項目の因子負荷量を0.4以上とすれば、単純構造が得られたであろう。

②アメリカ男子青年（以下アメリカMと略す）。

4因子が抽出され、分散10.088、すなわち全分散の37.36%が説明された。この因子構造は完全に直交しており、単純構造であった。

因子Ⅰ—社会的規範としての子育て

この因子の分散は4.034、寄与率は14.94%（相対寄与率は39.98%）だった。負荷量のもっとも高かった項目はC13（0.764）であった。その他、因子負荷量0.35を越えたのはC18、

Table 2 American Male Adolescents

	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4
C13	0.76437	0.14816	-0.04615	0.14277
C18	0.75675	0.18689	-0.01772	-0.05117
C15	0.75389	0.08031	0.03258	0.20652
C6	0.75305	0.30135	0.05463	-0.04637
C4	0.69315	0.15301	0.16594	0.15474
C14	0.66983	0.15928	-0.01950	0.16953
C7	0.39303	0.27107	0.12682	0.19278
C23	0.15002	0.67790	-0.18421	0.05833
C26	0.30676	0.62759	0.12646	0.10455
C21	0.16744	0.57929	-0.07709	-0.05251
C19	0.15134	0.54165	-0.19837	0.16246
C24	0.15720	0.46109	0.18586	-0.41310
C20	0.28020	0.45954	0.14782	0.21235
C27	0.29949	0.44265	-0.34093	0.10364
C12	0.16543	0.41044	0.26569	-0.05290
C1	0.06588	0.35479	-0.19137	-0.04981
C22	0.22010	0.28783	0.23131	-0.02324
C5	0.11431	0.27264	-0.07326	0.20132
C11	0.00252	0.01390	0.75389	-0.07324
C17	0.27259	-0.09632	0.49752	-0.06729
C10	0.08952	-0.18497	0.41255	0.06564
C9	0.01492	-0.03153	0.38111	0.12598
C3	0.04486	0.03749	0.33460	0.13085
C16	0.28451	0.17906	-0.07524	0.59665
C8	0.11731	0.08563	0.15204	0.54096
C25	0.05479	-0.03653	-0.08508	-0.29701
C2	0.14836	0.09547	0.02360	-0.32584
$\Sigma\sigma^2$	4.033933	2.925949	1.764262	1.364163
	14.94	10.84	6.52	5.05

C15, C6 (子どもを産み育てるのは社会に対する義務だ), C4 (女性は母親になって初めて完成される), C14, C7 (子どもの存在によって, 家の中での自分の位置が定まったような気がする) の6項目であった。これらの項目は, 順序は違うけれどアメリカAの分析の場合と同じであったので『社会的規範としての子育て』と命名した。これらの項目の評定値は, 3.4~4.1の範囲であった。アメリカMは, アメリカAの分析と同様, 女性が子どもを生み育てることによって社会的に認められるという考えには同意しなかった。

因子Ⅱ - 生きがいとしての子ども

分散2.925が説明された。寄与率は10.84%であった。0.35以上の高い因子負荷量を持った項目は, C23, C26, C21, C19, C24, C20 (子どもがいることで, 夫婦の危機が救われることがある), C27, C12 (子どもがほめられたとき, 自分もほめられた気になる), C1 (子どもは天からの授かりもの) の9項目であった。これらの中の5項目は, アメリカAの因子Ⅱでも負荷量が高く, そして中でもC23は0.678と負荷量ももっとも高く, C26は2番目で0.628であった。C24はまた因子Ⅳで負荷量0.412であった。この因子は『生きがいとしての子ども』と命名されよう。9項目全ての評定値は, 2.7以下であった。アメリカMは, 子どもは生きがいであるという考え方に同意していた。

因子Ⅲ - かせとしての子ども

この因子は分散1.764, 寄与率6.53% (相対寄与率は17.45%) であった。因子負荷量0.35以上の項目は, C11, C17, C10, C9 (親には親の世界が, 子どもには子どもの世界がある) であった。これらのうち3項目は, アメリカAの因子Ⅲと同じであるにもかかわらず, この因子は, C3のかわりのC9の存在を見ても, 子どもがトラブルメーカーであるというよりも, むしろ悩ませるもの, 扱い難いものと思われていることを示している。これらのすべての評定値は, C10が2.5であったことを除けば3.2以上であった。

因子Ⅳ - 子ども観の推移

この因子は分散1.364, 全分散の5.05%を説明した。0.35よりも負荷量が高かったのは, C16 (夫婦にとって子どもができるのは当然である), C8 (子どもには親のかねえられなかったことをやらせたい), C24の3項目である。

この因子は『子どもが産まれ……』『子どもに夢を託して……』『生きた証を残したい……』という子どもに対する見方の移り変わりを示しており『子ども観の推移』の因子と命名されよう。評定値は2.6以下であった。この因子に関してアメリカMの考えは肯定的であった。

③アメリカ青年女子 (以下アメリカFと略す)。

Table 3 American Female Adolescents

	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4
C15	0.76564	1.18781	0.10405	0.07271
C18	0.75262	0.07499	0.11267	0.14955
C14	0.69484	0.28007	0.14472	0.03411
C13	0.51832	0.17891	-0.13086	-0.01349
C6	0.47920	0.14850	-0.17875	-0.05947
C4	0.46976	0.21673	-0.04774	-0.05901
C16	0.43055	0.41256	-0.03190	0.12992
C20	0.29657	0.10906	0.20791	0.23844
C21	0.12110	0.63499	0.25060	-0.06280
C23	0.17641	0.60759	0.19124	0.07421
C19	0.16727	0.49306	0.06905	-0.04230
C5	0.23355	0.45422	0.01144	0.01993
C27	0.24628	0.43643	0.15513	-0.18820
C1	0.13142	0.40066	-0.00790	-0.01230
C12	0.04885	0.34133	0.21311	0.15224
C8	-0.02515	0.28167	0.13275	0.07910
C22	0.06050	0.20593	0.67888	-0.00236
C24	0.18732	0.29078	0.61584	0.08556
C26	0.31282	0.26484	0.34407	-0.05545
C25	-0.11090	0.02104	0.29573	0.07159
C17	0.07275	-0.00953	0.07052	0.61871
C10	-0.05234	0.01708	-0.02263	0.56508
C3	0.06157	-0.04520	0.03204	0.42554
C2	0.01027	0.06380	0.08820	0.27285
C11	0.14271	0.05794	0.16365	0.19614
C7	0.32676	0.26100	-0.09504	0.11252
C9	0.03207	-0.01456	-0.00469	0.09777
$\Sigma\sigma^2$	3.126014	2.446963	1.427615	1.220225

5つの直交した因子が抽出され、分散9.131が説明された。寄与率は33.78%であった。この因子構造は、C6とC16を除くと単純構造となる。

因子Ⅰ－社会的規範としての子育て

この因子は分散3.126、そして寄与率11.58%であった。0.35以上の負荷量は7項目あった。これらのうちC6（因子Ⅴでも0.472の負荷量があった）を除く6項目は、アメリカAとアメリカMの因子Ⅰと同じであった。評定値は、C6の2.9以外は3.7を越えており、アメリカMよりも『社会的規範としての子育て』という考えにより反対であった。

因子Ⅱ－素晴らしき存在としての子ども

分散2.447、寄与率は9.063%であった。C21、C23、C9、C5（夫婦が子どもを欲しいと思うのは当然である）、C27、及びC1のうち、最大の項目から5番目の項目まではアメリカAの因子Ⅱの場合と同じであった。我々が採用した最後の項目のC1は、負荷量0.401であった。

アメリカFは子どもを素晴らしい存在と見なしており、この因子は『素晴らしき存在としての子ども』と命名されよう。C27は、アメリカ青年の3つ全ての因子分析において、因子負荷量が0.35以上であった。

これらの項目の評定値は、因子Ⅱと同様に1.5～2.2ときわめて肯定的であり、女子は男子よりも肯定的であった。すなわち、彼女たちは、子どもを持つことを熱望しているように思われる。

因子Ⅲ－自己の分身としての子ども

分散1.428で、全分散の5.29%が説明された。因子負荷量の大きい項目は、わずか2項目（C22とC24）であったが、アメリカAの因子Ⅳ（「自己の分身としての子ども」）に類似していた。

回答者は、これらの項目を2.2と2.3と、肯定的に評定していた。

因子Ⅳ－トラブルメーカーとしての子ども

この因子は、分散1.220で、全分散の4.52%を説明した。因子負荷量0.35以上ある項目は、

C17、C10およびC3で、アメリカAの因子Ⅲにも見られたので、この因子は『トラブルメーカーとしての子ども』と命名された。

この項目の評定値は3.7～3.9でやや否定的であった。

以上、アメリカの3つの因子分析において、4つずつの因子が、分散8.221～10.088の範囲で抽出された。アメリカA及びFの分析の結果は類似していたが、男子はやや異なっていた（特に因子Ⅳの『子ども観の推移』）。

また項目との関係については、Table7に見られるように、3つのすべての因子分析において負荷量0.35以上を有するのは17項目。逆にどの因子分析においても、負荷量が0.35以下の項目はわずかに2つであった。

Ⅱ. 日 本

①日本青年男女（以下日本Aと略す）

固有値1.00以上の、相互に直交した因子が4つ抽出された。説明された分散は8.908で、寄与率は32.99%であった。

この分散は、アメリカAの分散よりも少し大きい。この因子構造はC16とC12を除くと単純構造となり、もし採用する項目の因子負荷量の基準を0.4以上としたならば、この因子構造は完全にシンプルとなった。

因子Ⅰ－社会的規範としての子育て

分散2.98、寄与率10.70%（相対寄与率は33.52%）であった。負荷量が0.35以上の項目はC15、C18など8項目で、そのうち、7項目は3つのアメリカ青年の因子Ⅰと類似していた『社会的規範としての子育て』と命名された（C16は、8項目中最小の負荷量であったが、因子Ⅰでは0.487であった）。8項目の評定値は、C16の3.9以外、2.9以下であった。これは、日本人青年はアメリカ人青年ほど社会的規範としての子育てを否定していないということである。

Table 4 All Japanese Adolescents

	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4
C14	0.77196	0.17664	0.09680	-0.06263
C15	0.61776	0.06609	0.14153	0.13645
C4	0.60921	0.13033	-0.00115	-0.01095
C18	0.57079	0.11170	0.24499	0.03147
C13	0.56195	0.28982	0.30834	0.03119
C6	0.47462	0.03765	0.15520	-0.08508
C7	0.40979	0.10931	0.29494	0.11286
C1	0.24518	0.24259	0.11832	-0.06486
C26	0.21675	0.67525	0.14006	-0.13677
C21	0.06542	0.59437	0.06211	-0.03006
C23	0.19350	0.57422	0.21837	-0.08869
C16	0.38855	0.49642	0.00179	-0.07642
C12	0.07368	0.48079	0.36328	-0.08077
C11	0.12675	0.39080	0.31190	0.02385
C9	-0.04862	0.39024	-0.14542	0.16798
C19	0.17258	0.38232	0.31536	0.13102
C20	0.06206	0.37165	0.12009	0.12685
C5	0.29887	0.36492	-0.03465	-0.17432
C27	0.10623	0.34844	0.06114	-0.12532
C24	0.27410	0.22618	0.63293	0.04468
C22	0.22836	0.16534	0.62453	-0.09592
C8	0.06689	0.01623	0.36748	0.01616
C2	0.08944	0.10047	0.21893	0.00519
C25	0.01442	0.20723	-0.26705	-0.13083
C17	0.04132	-0.02661	0.02965	0.71912
C10	-0.01120	0.01798	-0.00982	0.62282
C3	0.00163	-0.09901	-0.00830	0.39517
$\Sigma\sigma^2$	2.983151	2.824323	1.795920	1.286749

因子Ⅱ－生きがいとしての子ども

分散2.950が説明された(寄与率10.93%)。基準より負荷量が大きかったのは11項目で、C26, C21, C21, C23, C16, C12, C9, C11, C19, C5, C20及びC27であった。このうち8項目はアメリカMの因子Ⅱと同じであった。したがってこの因子は『生きがいとしての子ども』と命名された。

これらの評定値は、アメリカMに比べて肯定的であった。

因子Ⅲ－自己の分身としての子ども

この因子の分散は、因子Ⅱよりもおよそ1.000少なかった。寄与率は6.90%。負荷量0.35を越えたのは4項目あって、C24, C22,

C2(自分が動けなくなったとき、わが子に面倒をみてもらいたい), C12である。その中でC12は、この因子(0.366)と、因子Ⅱ(0.479)と重複している。この因子は負荷量のきわめて大きいC24とC22を重視してアメリカAの因子Ⅳと同様、『自己の分身としての子ども』の因子と命名した。この項目の評定は、C12の1.9以外、中性であった。

因子Ⅳ－トラブルメーカーとしての子ども

分散1.29, 寄与率4.76%であった。基準以上の負荷量を示す項目は、アメリカFの因子Ⅳと同じく、C17, C10及びC3の3つで、この因子は『トラブルメーカーとしての子ども』と名づけられた。

C17とC10の評定値は2.83以下であったが、

Table 5 Japanese Male Adolescents

	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4
C14	0.75024	0.15630	0.15110	0.06064
C18	0.72340	2.24093	0.06033	-0.04898
C15	0.64498	0.07044	0.18443	0.16333
C13	0.61968	0.29420	0.21787	0.06627
C6	0.56708	0.02171	0.13494	-0.12319
C7	0.53842	0.26266	0.32032	0.10919
C4	0.51608	0.21342	-0.04818	0.08434
C1	0.23855	0.19954	0.04470	-0.03558
C26	0.22836	0.73319	0.16384	-0.03209
C23	0.16343	0.67426	0.15404	0.02273
C16	0.34609	0.62715	-0.02761	-0.09068
C21	0.05678	0.56421	0.11046	0.08419
C5	0.31458	0.48317	0.08475	-0.06407
C12	0.01878	0.44092	0.42116	-0.18384
C11	0.24256	0.38851	0.32759	-0.00100
C9	-0.00969	0.36365	-0.23637	0.27502
C2	0.08262	0.23827	0.20919	-0.01677
C27	0.11324	0.23293	-0.01317	-0.03064
C24	0.33933	0.36359	0.53801	-0.02777
C22	0.26273	0.15833	0.49913	-0.12160
C19	0.11000	0.42984	0.45034	-0.08358
C8	0.08052	0.01683	0.32980	-0.06898
C20	0.02101	0.16839	0.24327	0.21289
C25	-0.02270	0.09187	-0.41416	-0.13099
C10	0.07266	0.00525	-0.11904	0.74567
C17	0.14967	-0.08059	-0.01495	0.63379
C3	-0.09940	-0.05510	0.03930	0.56491
$\Sigma\sigma^2$	3.441909	3.243410	1.785118	1.570851

C3は3.7であった(アメリカAは3.2以上に評定していた)。

②日本人青年男子(以下日本Mと略す)

分散10.046, すなわち全分散の37.21%が説明され, 直交した4因子が抽出された。説明された分散が10以上なのは, アメリカMと日本Mの二つだけだった。

因子Ⅰ-社会的規範としての子育て

分散4.034, 寄与率12.77%(相対寄与率39.98%)であった。順序は異なったが, アメリカA及びMの因子Ⅰと同じ7項目<C14, C18, C15, C13(子どもを産んで育てるのは女性の一つのつとめである), C6, C7, C4>の因子負荷量が基準以上であり、『社会的規範としての子育て』と命名された。これらの項目をアメリカMは否定的に評定し(3.6以上)日本Mは中性的に評定した(3.1以下)。

因子Ⅱ-生きがいとしての子ども

分散3.243, すなわち全分散の12.01%が説明された。

因子負荷量が基準以上の項目は, C26, C23, C16, C12, C11, C9, C19及びC24の10項目であった。そのうち, C19とC24以外の8項目は日本Aの因子Ⅱと, 6項目(C26, C23, C21, C12, C19及びC24)は, アメリカMの因子Ⅱと共通であった。したがって『生きがいとしての子ども』因子と命名された。またC19とC24は因子Ⅲにおいても負荷量が大きかった。

これらの項目の評定値は, 1.6~2.0でかなり低く, 日本Mは、『子どもは生きがい』という考えに賛成していた。

因子Ⅲ-子どもとの一体感

この因子の分散は1.735で, 因子Ⅱのほぼ半分となっていた(寄与率6.61%)。C24とC22は, 死後も子どもと共に生き続けることを信じていることを示唆しており、『子どもとの一体感』と命名されよう。

C25(子どもがどのような道を選ぼうと, それを認めてやりたい)は, すべての因子分析の中で, 絶対値が0.35以上のマイナスの負

荷量(-0.414)を持っていた。

興味深いことに, C22とC24に対してアメリカAが肯定的に評定しているのに対して, 日本Mは中性的に, またC25に対してはきわめて否定的に評定していた。

C12, C24およびC19は, この因子と因子Ⅱの両方に大きな負荷量を持っていた。

因子Ⅳ-トラブルメーカーとしての子ども

説明された分散は1.571, 寄与率は5.82%であった。日本人Aの因子Ⅳと同じ3項目(C10, C17, C3)の負荷量が大きかった。そこで『トラブルメーカーとしての子ども』と命名された。C10とC17の評定値は中性的であったが, C3は否定的であった。けれども, これら3項目に関して, アメリカMはすべて否定的であった。

③日本青年女子(以下, 日本Fと略す)。

直交した5因子が抽出され, 分散9.639, 全分散の35.70%が説明された。第5因子が抽出されたのは, 本研究で初めてであったが, 各因子の固有値はいずれも2.5以下であまり大きくなかった。

因子Ⅰ-生きがいとしての子ども

分散2.439で, 全分散の9.03%が説明された。負荷量の大きな項目(最大でも0.555)は, C12, C21, C20, C26, C23, C11及びC19の7項目であった。これまでの5つの因子分析の第一因子が全て、『社会的規範としての子育て』であったのと異なり, この因子は『生きがいとしての子ども』と命名された。

C26は因子Ⅳでも0.447の負荷量があった。これらの項目の評定値は1.4~2.0で, かなりポジティブに偏っていた。

因子Ⅱ-社会的規範としての子育て

分散2.206, 寄与率8.17%(相対寄与率22.89%)であった。

負荷量が0.35以上の項目は, C14, C4, C15, およびC13の4項目だけだった(C13以外の負荷量は0.63以上であった)。これらの項目は, 本研究の他の5つの分析の第一因子『社会的規範としての子育て』の中心的な項目で

Table 6 Japanese Female Adolescents

	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4	FACTOR 5
C12	0.55529	0.09734	0.23910	0.13278	0.06429
C21	0.54729	0.08994	-0.02836	0.15286	-0.14079
C20	0.54664	0.11714	0.00927	0.04957	0.08487
C26	0.52825	0.09483	0.11538	0.44657	-0.17986
C23	0.52339	0.16590	0.20416	0.16398	-0.17310
C11	0.50225	0.04476	0.18416	0.05210	0.02651
C19	0.43937	0.18305	0.21270	0.08095	-0.12933
C9	0.29696	-0.12538	-0.10966	0.19492	0.09807
C14	0.17618	0.83054	0.19064	0.12831	-0.15276
C4	0.08775	0.66892	0.13611	0.09473	-0.08289
C15	0.16407	0.63119	0.17198	-0.03155	0.13647
C6	-0.03056	0.30207	0.27106	0.26123	-0.00246
C1	0.17251	0.26023	0.17486	0.13647	-0.14403
C24	0.18169	0.05249	0.72920	0.08317	-0.06404
C22	0.30680	0.11436	0.68321	-0.03705	-0.13069
C13	0.21855	0.35674	0.46662	0.32993	0.08636
C18	0.00302	0.28975	0.46550	0.27605	0.15051
C7	-0.00282	0.19909	0.33961	0.16589	0.13217
C8	0.09372	0.04095	0.33335	-0.08308	0.09524
C2	-0.00990	0.07608	0.22774	-0.05860	-0.00370
C27	0.18314	-0.01847	0.17035	0.55290	-0.23069
C16	0.23474	0.28182	0.06703	0.53515	0.05134
C5	0.13207	0.18234	-0.05306	0.42723	-0.17584
C25	0.15114	-0.02035	-0.13077	0.35901	-1.13507
C17	0.05885	-0.01193	0.00654	-0.13323	0.73419
C10	0.03742	-0.06629	0.02627	-0.12235	0.48622
C3	-0.17763	0.01888	0.05936	-0.01785	0.29397
$\Sigma\sigma^2$	2.438660	2.206129	2.161669	1.598075	1.234827

あった。C13の評定値は2.2だったが、C15のそれは3.2であり、日本Fは、子育てが社会的規範であると考え、子どもがいないと真の家族ではないという意見には反対していた。

因子Ⅲ－自己の分身としての子ども

分散2.162で、因子Ⅱとほぼ等しかった。C24、C22、C13およびC18の因子負荷量が基準以上に大であった。これらの項目のうち上位2項目(下位の項目よりも負荷量が0.2以上大きい)は、アメリカAの因子Ⅳや日本Aの因子Ⅲと共通していた。したがって『自己の分身としての子ども』と命名した。

評定値は2.2～2.9とやや肯定的で、子どもを自己の分身と見る見方に賛成していた。

因子Ⅳ－夫婦にとって自然な存在としての子ども

分散1.598、全分散の5.92% (相対寄与率16.58%)が説明された。因子負荷量はあまり大きくなかったが(0.552以下)、規準以上の負荷量を示した項目は、C27、C16、C26、C5およびC25の5項目であった。これらは、子どもが夫婦にとって自然な、さらには不可欠な存在であることを示唆していた。

5項目の評定値は1.5～1.7ときわめて肯定的に偏っていた。

因子Ⅴ－かせとしての子ども

分散1.235、寄与率4.57%であった。基準以上の負荷量を有す項目はC17とC10しかなかった。日本Aや日本Mの因子Ⅳ『トラブル

メーカーとしての子ども』と類似していたが、C3（子どもがいると夫婦間に問題をたくさんひきおこす）がなかったので、『かせとしての子ども』と命名した。

項目の評定値は2.7と2.8で、ほぼ中性であった。

以上3つの日本の因子分析において、いずれの分析でも因子負荷量が0.35以上の項目は17あったのに対して、いずれの分析でも負荷量が基準を越えなかった項目はC1とC2のみであった。（Table 7 参照）

Table 7 Relations between items and factor analysis

Items No	America			Japan		
	All	Males	Females	All	Males	Females
1	F 2	F 2	F 2			
2						
3	F 3		F 4	F 4	F 4	
4	F 1	F 1	F 1	F 1	F 1	F 2
5	F 2		F 2	F 2	F 2	F 4
6	F 1	F 1	F 1	F 1	F 1	
7	F 1	F 1	F 5	F 1	F 1	
8		F 4		F 3		
9		F 3		F 2	F 2	
10	F 3	F 3	F 4	F 4	F 4	F 5
11	F 3	F 3	F 5	F 2	F 2	F 1
12		F 2		F 2 F 3	F 2 F 3	F 1
13	F 1	F 1	F 1	F 1	F 1	F 3 F 2
14	F 1	F 1	F 1	F 1	F 1	F 2
15	F 1	F 1	F 1	F 1	F 1	F 2
16	F 2	F 4	F 1 F 2	F 2 F 1	F 2	F 4
17	F 3	F 3	F 4	F 4	F 4	F 5
18	F 1	F 1	F 1	F 1	F 1	F 3
19	F 2	F 2	F 2	F 2	F 3 F 2	F 1
20		F 2		F 2		F 1
21	F 2	F 2	F 2	F 2	F 2	F 1
22	F 4		F 3	F 3	F 3	F 3
23	F 2	F 2	F 2	F 2	F 2	F 1
24	F 2	F 2	F 3	F 3	F 3 F 2	F 3
25					F 3	F 4
26	F 4	F 2		F 2	F 2	F 1 F 4
27	F 2	F 2	F 2	F 2		F 4

考 察

本田他（1981）は、日本女性（既婚及び未婚）に子どもに対する認知と態度について因子分析的研究をおこなった。そして次のような直交した5因子を見出している。

因子Ⅰ（社会的規範としての子；寄与率13.2%で、C13、C6、C18）、因子Ⅱ（生きがい

としての子；寄与率は12.3%で負荷量の大きな代表的な項目はC12、C11、C26）、因子Ⅲ（自己の分身としての子；寄与率は9.3%で代表的な項目はC24、C22、C27）、因子Ⅳ（かせとしての子；寄与率は6.5%。負荷量の大きな項目はC10、C17、C3）、そして因子Ⅴ（独立した存在としての子；寄与率は5.6%。代表的な項目はC21、C25、C9）。

若い世代になるほど、子育てを社会的義務、自己の分身、生きがいと考えることに反対の傾向を示していた。子どもに関する認識と態度は、世代によって、そして教育程度やキャリアの違いによって異なっていた。

本分析において、我々は以前の研究の因子Vを除く全ての因子を見つけた (Table 8 参照)。日本Fに関しては5因子が抽出され本田他の結果と対応した。がまた、『子どもとの一体感』『子ども観の推移』のようないくつかの新しい因子も発見された。一方『社会的規範としての子育て』因子は、全ての因子分析において抽出された。しかも日本Fでの第二因子以外、第一因子だった。この因子の項

目は、日本では肯定的ないし中性的に評定されたが、アメリカでは否定的に評定された。個人主義的なアメリカ人にとって、子育ては個人的出来事であって、社会的に規定されることではないと考えられているようである。

『生きがいとしての子ども』因子は、日本Fでは第一因子、アメリカM・日本A・日本Mでは第二因子であった。いずれの分析でも肯定的に評定されたが、日本Aの方がアメリカAよりもより肯定的であった。

『トラブルメーカーとしての子ども』因子はアメリカAの第三因子、アメリカF・日本Aと日本Mの第四因子として抽出された。

日本とアメリカの青年は共に、『トラブル

Table 8 Summary about Factor Analyses

	Factor I	Factor II	Factor III	Factor IV	Factor V
American Male-Female Adolescents	Child-rearing as a social norm	Children as wonderful beings	Children as trouble-makers	Children as alter ego	-
American Male Adolescents	"	Children as something to live for	Children as shackles	Change of viepoint about children	-
American Female Adolescents	"	Children as wonderful beings	Children as alter ego	Children as trouble-makers	-
Japanese Male-Female Adolescents	"	Children as something to live for	"	"	-
Japanese Male Adolescent	"	"	Feeling of identification with children	"	-
Japanese Female Adolescents	Children as something to live for	Child-rearing as a social norm	Children as alter ego	Children as natural beings among parents	Children as shackles

メーカーとしての子ども』の項目には否定的であった。これは彼らが、彼ら自身を子どもと考えているためかもしれない。そして無意識に自分自身を防衛しているのかもしれない。

『自己の分身としての子ども』因子は、日本A及び日本Fの第三因子として、またアメリカAの第四因子として現れた。予想に反

して、この因子の項目の評定は、アメリカAの方が日本Aよりも肯定的であった。近年アメリカでは、離婚して子どもを相手にとられた場合、子どもを誘拐したり、転職して転居した子どもを追いかけるケースが増加しているが、このことやさらに契約社会での血のつながりの強さと関係があるのかもしれない。

なお、大まかに考えるならば、『生きがいとしての子ども』因子と『かせとしての子ども』因子は『トラブルメーカーとしての子ども』因子と、さらに『子どもとの一体感』因子は『自己の分身としての子ども』因子と合体してよいのかもしれない。

また、興味深かったのは、C1（子どもは天からの授かり物）が、アメリカでは3つすべての分析で第二因子に現れたが、日本では

いずれの分析にも見いだされなかったことであった。

ちなみに、アメリカAと日本Aの間の27項目の評定の平均値差をt検定によって検定した。その結果Table 9に示したように2グループ間のほとんど全てに有意に大きな差が見出された。

Table 9 Rating values of Americans and Japanese

	Agree	Neutral	Disagree
※ 1. Children are God's gift.	+-----+	△-----+	+-----+
2. I wish my children would support me financially if I could not support myself.	+-----+	△-----+	+-----+
※ 3. Children may create a lot of trouble between their parents.	+-----+	+-----○	△-----+
※ 4. A woman is not complete until she has had a child.	+-----+	△-----+	+-----○
※※ 5. It is natural for a married couple to want a child.	+-----△	+-----○	+-----+
※ 6. It is a duty to one's society to bear and raise a child.	+-----+	△-----+	+-----○
※※ 7. I feel that my position in my house may be determined by my children.	+-----+	△-----+	+-----○
※※ 8. I would like my children to be able to do what I could not.	+-----○	+-----+	△-----+
※※ 9. Parents have their own world and children have their own worlds.	+-----△	+-----+	+-----○
※10. Children prevent their parents from behaving freely.	+-----+	△-----+	+-----○
※※11. Parents feel happy only if their children think parents are necessary.	+-----○	+-----+	△-----+
12. Parents feel as if they are praised if their children are praised.	+-----△	+-----+	+-----+
※13. It is a woman's duty to bear and raise a child.	+-----+	△-----+	+-----○
※14. Parents cannot experience the important things in life until they raise children.	+-----+	△-----+	+-----○
※15. A family without children is not a real family.	+-----+	+-----△	+-----○
※※16. It is natural that a child will be born to a couple.	+-----△	+-----○	+-----+

	Agree	Neutral	Disagree
※17. To take care of children is to be psychologically and physiologically tired.	+-----+-----△+-----○+-----+-----+		
※18. The true meaning of a marriage is to bear a child.	+-----+-----△+-----+-----○+-----+		
※19. Children's growth is the greatest pleasure to their parents.	+-----○-△-----+-----+-----+-----+		
※※20. The existence of children may serve to rescue their parents from danger of divorce.	+-----△-----+-----+-----+-----+		
※※21. Raising children is linked to the parents' own growth.	+---△-○-----+-----+-----+-----+		
※22. Parents may feel that by having children, their lives will continue after their death.	+-----+-----○-△+-----+-----+-----+		
※※23. Children strengthen the bond between their parents.	+-----△+-----○-----+-----+-----+-----+		
※24. Parents may leave evidence of having lived by bearing a child.	+-----+-----○-△+-----+-----+-----+		
※※25. Parents should permit their children to live their own lives as they choose.	+-----△+-----○-----+-----+-----+-----+		
※※26. Having a child gives parents something to live for.	+-----△+-----○-----+-----+-----+-----+		
※ (27. [FEMALES ONLY]: Since I am a woman, I would want to bear a child.	+---△-+-----+-----+-----+-----+		
28. [MALES ONLY]: If I were a woman, I would want to bear a child.	+-----+-----○-△-----+-----+-----+-----+		

△ : All-Americans
○ : All-Japanese

☆ note ; ※ : sig., P<0.001 (sig. P<0.001 for variance by F-test)
※※ : sig., P<0.001 (no sig. for variance by F-test)

文 献

1. 福井とみ子他, 1976, 女性の生活史に関する研究Ⅱ—子どもの価値観 (日本教育心理学会第18回総会)
2. 本田時雄他, 1981, 第3章 夫・子・老親と女性, 『いま女性は』 (女性の生活史研究会編 福村出版)
3. 戸恒香苗他, 1977, 女性の生活史に関する研究Ⅲ—母親観と子ども観 (日本教育心理学会第19回総会)
4. Toshimitu Takei at all. 1990 A Compa-

5. Yoshimitu Takei at all. 1991 the Impact of Life Stages on Parent-Child Relationships ; A Conprative Look at Japanese and American University students. Conprative and International Education Society.
6. 東洋他, 1981, 母親の態度行動と子どもの知的発達 ; 日米比較研究 (東京大学出版会)